

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	中屋敷 千尋
論文題目	つながりの文化人類学 インド・チベット系社会における親族と非親族をめぐって		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、インド・ヒマラヤ地方に位置するスピティのチベット系社会を対象に、人びとのつながりがどのように作りだされるのか、それはどのような性質のものかを明らかにすることである。具体的には、約20ヶ月のフィールド調査に基づき、これまで注目されてこなかった日常生活を支える互助的な親族カテゴリー、ニリンがいかなる関係を意味し、どのようなつながりなのかを「場と時間の共有」という視座から考察する。さらに、非親族（低階層の人びと、隣人や友人）との関係についても論じる。</p> <p>本論文は、序章と終章に加え八章から構成される。この八章は、第一部「家族と親族」、第二部「ニリンをめぐる関わり」、第三部「非親族との関わり」の三部に分かれる。</p> <p>序章では、チベット系社会における親族研究、道義と戦術をめぐる議論、血液など身体を構成する物体を意味するサブスタンスを重視する研究の三点について先行研究を批判的に検討する。それぞれ、1) 父系出自集団以外の親族への注目の欠如、2) 道義と戦術という親族研究における本質主義の限界、3) 個人主義的な交換を強調するサブスタンス概念の限界、という問題点を指摘する。これを受ける形で本論文は、1) 日常生活を支えるニリンの実態の解明、2) 日々のやり取りに見る道義と戦術の再検討、そして3) 「場と時間の共有」への着目という視座からチベット系社会の解明に取り組むと述べている。</p> <p>第一部では、スピティにおける家族と親族の概要を示す。</p> <p>第一章「調査地の説明」では、対象地であるスピティ地域の地理的、社会的特徴を説明し、近年では政治・経済的、社会的に劇的な変容を遂げていることを指摘する。</p> <p>第二章「チベット系社会における家族と親族」では、父系出自の観念と父系出自集団、世帯について、それぞれ近年の変容もあわせて説明する。</p> <p>第三章「スピティにおける家族と親族」では、まず家屋とその成員を意味するカンパについて説明する。カンパは相続の認識の変化や出稼ぎなどによる居住形態の変化との関連で理解する必要がある。つぎに、「骨」と称されてきた、父系出自の観念に関しては希薄化の傾向があることを指摘する。最後に、以下のようにニリンについて説明する。ニリンは、血縁のある者や姻戚の中で、とくに親密な関係にある人びとを指す。ニリンは個人を起点として血縁と姻戚を含む親族を意味するが、誰がニリンかは日々の付き合いによって決まる。ニリン関係は日々の戦術的な付き合いを通じて築かれるが、そこには道義も生まれうる。</p> <p>第二部では、日々のニリンの関係がそれぞれの場面でどのように立ち現れるのかについて検討を行う。</p>			

第四章「経済活動」では、商人同士の関係と農作業における関係をとりあげ、その実態を明らかにする。農作業においては、収穫物や自らの体力の兼ね合いから特定の条件にあう相互扶助の相手を選ばれる。その際、気心の知れた女性が集まる。この関係は場合によっては義務関係を生み出す。他方で、収穫量に影響する農業用水の管理をめぐって人びとは緊張関係にある。

第五章「宗教実践」では儀礼をとりあげ、ニリンや隣人、友人だけでなく、過去の関係が想起されることによって普段関わりがない人も、モノや労働力を提供していることを明らかにする。死者儀礼ではニリンや隣人が取り乱す遺族をなだめ、ともに寄り添い、支える。こうした人びとのあいだのつながりは、情動だけでなく厄災をも共有する関係である。このつながりは固定したものではなく、場合によっては何らかの出来事を契機として解消される。

第六章「政治実践」では、インドの政治体制の変化を背景に、選挙においてニリンが人びとを動員する資源として注目されていることを指摘する。選挙では、政黨員は、普段ニリンと呼ばない人にまで戦術的にニリンという言葉を用いて働きかけ、票を獲得しようとする。働きかけられる投票者は場合によっては敵対する双方の政黨員からニリンの関係を強調され、投票行動の決定困難に陥るという事態も生じている。なかには、利権争いの結果として団体と化したニリンも存在する。

第三部では、非親族との関わりについて検討する。

第七章「階層と親族」では、非親族のなかでも階層間関係をとりあげ、以下の点について指摘している。日々の関係は、公的な場では良好になっているが、私的な場では依然として下層の人びとに対して差別発言が見られる。政治の場面では、選挙制度や留保制度によって下層の人びとが政治決定に参加できるようになり、政治的な地位や発言力が大きくなっている。ただし、宴会では中間層の人びとが下層の人びとに差別発言や暴力行為を繰り返すことが顕著になってきており、政治の場面での地位の揺らぎの反動ともとれる現象が生じている。

第八章「隣人と友人関係」では、ニリンよりも隣人のほうが日常的に細やかな相互扶助関係を築いていることを示す。隣人とは相互扶助だけでなく暇な時間をともに過ごすなど、濃密な関係が生じる。その過程で、互いに気をつかうような態度も認められる。ときにはニリンの関係を越えるような対応をとることや、家族として言及されることもある。しかし、その関係は安定しているとは必ずしも言えない。

終章では、まとめと考察を通じ、1) チベット系社会の親族研究に対しては、系譜的なつながりだけでなく、日々の関わりを通して築かれる親族（ニリン）に注目する必要があること、関わりに注目するかぎり親族と非親族とのあいだの区別は明確なものではないこと、2) 道義と戦術が状況に応じて選択される重要な概念であること、3) サブスタンス概念には還元できない人びとのつながりが存在し、そのつながりは「場と時間の共有」によって理解可能となること、以上の三点を明らかにする。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文（以下本論文）は、インド・ヒマラヤ地域に位置するスピティのチベット系社会について、およそ20ヶ月の集約的な調査に基づき、日々の人間関係の実態について論じている。本論文の評価すべき点は以下の三点にある。1) 対象と方法の独自性、2) 親族研究への貢献、3) 理論的貢献である。

1) 対象と方法の独自性

インド・ヒマラヤのチベット社会については、チベット仏教（僧院）やシャーマニズム、親族、一妻多夫制度などのテーマを中心に文化人類学的な研究が行われてきた。しかし、本論文のように日々の実践に注目し、そこから経済、宗教、政治の領域を包括的に扱おうとする視点はきわめて独創的である。本論文が扱っている日々の実践は、通常なら見逃してしまうような些細なやり取りであるという点である。申請者は、日々のやり取りに注目し丹念に状況を記述・分析している。この点について三点指摘しておきたい。

ここで、まず注目したいのは、こうした事例には現地の人びとと申請者とのやり取りも含まれるということである。現地の人びととの付き合いなしに調査が不可能であったにもかかわらず、文化人類学者自身が論文や著作の中に登場することはなかったという批判を受ける形で、前世紀末から「実験的民族誌」の試みがなされてきた。本論文もまた、このような批判的民族誌の系譜に位置付けられる。

つぎに注目したいのは、女性たちの日常的な関係である。本研究においてジェンダーは中心的なテーマではないが、申請者が女性であることから、日々のやり取りもまた女性同士のつきあいについての事例が多く含まれる。その中には、猥談を語り合う女性たちの姿も記述されている。また、遺族を慰め、励ます女性たちの細やかな関係も大変印象的なものである。

最後に特記しておきたいのは、選挙活動についてである。申請者の関心は、修士論文執筆の段階からスピティの選挙活動にあった。申請者は、とくに選挙活動中の投票依頼について詳しく調査し、分析している。具体的な選挙活動についての文化人類学的研究はきわめて少なく、貴重な民族誌資料となっている。女性同士の付き合いであれ、選挙活動であれ、長期的な住込み調査を理想とする文化人類学的な研究によってはじめて可能となった論文として、高く評価したい。

2) 親族研究への貢献

申請者は、選挙活動の調査を通じて、ニリンと呼ばれる人びとの存在を発見した。そして、それがどのような形で選挙活動以外にも機能しているのかについて分析を行った。ニリンは、専門的にはキンドレッド (kindred) と呼ばれるもので、日本の親戚に相当する。誰が起点となるかによって集団の範囲も変わるため、エゴ中心の集団とみなされている。これは先祖を共通とすることを条件とし、親族集団の境界が

はっきりしている父系出自集団や母系出自集団と大きく異なる。チベット系社会において、従来報告されていたのは「骨」と表現される父系親族集団であった。この点で、ニリンの発見はきわめて重大である。それだけでなく、ニリンがチベット系社会のさまざまな領域でも重視されていることが明らかとなった。さらに、選挙活動との関係で、エゴ中心のニリンが、特定の男性を中心とする集団へと変貌する事例があることも明らかとなった。この変貌は、選挙のための利害集団として団体と化したものと言える。本研究は親族組織の変化という観点からさらなる研究へと展開できる貴重な資料である。

### 3) 理論的貢献

本論文の特徴は、豊富な民族誌資料に加え、先行研究を包括的にレビューすることで、民族誌資料をより広い理論的な枠組みで理解しようとしている点にある。中でも特筆すべきことからは、文化人類学の親族研究における重要な論争への貢献である。これは、ときに自己の利益に反するような行動にさえ個人を駆り立てるような道義的集団とみる立場と、具体的な親族関係を経済的な要因あるいは自己の利益拡大との関係で生まれる戦術的な集団と理解しようとする立場との対立についての論争である。こうした、道義か戦術かという論争は、親族とは何かという本質主義的な理解と密接に関係する。申請者は、本質主義的な問いを避け、人びとは状況に応じて道義と戦術を使い分けて行動していることを明らかにした。

本研究は、インド・ヒマラヤのチベット系社会についての良質な文化人類学的研究として位置づけることができる。本論文は、独創性に満ちたすぐれた学術論文であるという点で調査委員の意見が一致した。

以上を総合して本論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。また、平成29年6月29日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：            年            月            日以降